

# 学習障害(LD)児を支え その支援の輪をひろげてきた わたしたち

インタビュー 「いなほの会」代表 沼田夏子さん

編集 部

「いなほの会」代表沼田さんにお会いしました。前代表唐津裕子さんと浅見澄枝さんも同席してくださいました。「いなほの会」は新潟県の学習障害児や学習障害者の親の会です。

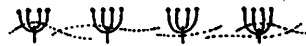
会発足から七年目の現在、一〇〇名を越える会員を擁するにいたるまでのご苦労とこれからの活動の課題などを御聞きしました。

— 多様な活動を発展させてきた「いなほの会」—  
学ぶこと、支え合うことがエネルギー—

一九九四年、上越市の上越教育大学で上野一彦氏（東京学芸大学）の『「学習障害（LD）児」について講演（朝日厚生文化事業主催）』がありました。

この講演会に参加した学習障害児をかかえておられる六人のおかあさんたちからこの会が始まりました。

「親ができることを考えよう。親がこのことをきちんと勉強してゆくことから始めよう。同じ思いのおかあさんたちと手をつなごう」と行動的なこのお母さん



たちの大奮闘がはじまりました。

翌年秋、自分達の企画で立ちあげた第一回の講演会(演題「学習に特異な困難を示す子供の理解と援助」)が初代代表唐津さんの住む柏崎市でおこなわれました。

「講師には上越教育大学の藤原義博先生にきていただきました。多くの方々の参加を願って、新潟日报社にも働きかけて記事にしてみました。」と沼田さんたち。学びの輪、情報を伝え合う輪をひろげる取り組みは創意工夫をこらして発展してゆきました。

「講演会」(資料1参照 編集部)、学習障害児の「事例検討会」(資料2参照 編集部)そして親同士の月例の「おしゃべり会」や子どもたちの夏休みの集い、冬のクリスマス会の全県交流会等々が柏崎市、長岡市、新潟市を中心にそれぞれ上中下越をカバーしながら活発に展開されています。

会報『いなほ』が発行されています。この会に関する詳しい情報はこの会報をみられるとよいと思います。

### 一 県教委の支援にささえられて

子どもと親を核にした支援体制の研究が本格化

沼田さんに学習障害への支援に関する情報をいろいろ

教えていただきました。

「学習障害についての研究、学習障害児への支援というこのあたらしい分野についての情報は三〇年前くらいにアメリカからもたらされたそうです。」「全国学習障害児親の会」は今年で十一周年をむかえます。学習障害児に関する学会も同じく十一年目です」

ともに最近成立した若い組織です。すべてがはじまったばかりだときき、この親の会は前人未踏の活動を切り開く困難さもたくさんあるが、若々しいエネルギーも満ちあふれていることを肌で感じました。

「ですから七年前、わたしたちが県内に親の会をつくろうと動きはじめた時、このあたらしい分野の子育て・教育に関する情報を入手すること、全国親の会からの情報を得ること、全国とのネットワークをつなぐことを一から始めることになりました」

「『いなほの会』の会員八割のいわゆる学習障害や軽度の自閉症、ADHD(注意欠陥多動性障害)などの子どもたちが通常学級に在籍しています。どの子どもにもそれぞれの個性にあった特別な教育的配慮が求められています。とりわけLD児(学習障害児)への教育的配慮は大切です。この児童たちは一人ひとりが



実に多様な個性・障害をもっていて簡単に診断しがた  
いと言います。一例としてすらすらと本が読めるが字  
を書くことができない、暗算は抜群にできるが、筆算  
をするとわからなくなる等々できることとできないこ  
とのバランスの悪い子どもがいます。低学年ではまま  
ある話なので親には自分の子どもの問題点は見えない  
こともあります。弱点はいずれも克服されるだろうと  
つつい月日を重ねている内に小学校の中学年、高学  
年になり、中学校にもいくようになり、その時点でそ  
の障害にあらためて気付くと言うことも多くあります。  
ですから、親としてわが子を客観的に見られるよう  
な支援がどうしても必要になります。医師・心理療法士、  
経験豊かな教員等々の専門家の集団的なチームによる支  
援体制の確立が急務となるのです。

これらの点で、わたしたちはそうした体制を行政的  
に支えてくださる教育委員会に大変お世話になってい  
ます。また親同士のネットワークづくりでお互いを知  
り合い支え合うことにも努めてきました。報道機関の  
ご支援もネットワークの発展におおきな力になりました  
。それらの成果の一端はさる六月八日付けの新潟日  
報の『LD児支援の輪広がる』の記事を御覧になって

ください」（資料2・3参照 編集部）

「行政が全国的なとりくみにうごきました。昨  
年まで政令都市と県のレベルで十五か所にあった文部  
科学省のこの問題にかんする研究事業が今年は全国四  
七都道府県で二か年計画ではじまります。新潟県教育  
委員会では専門家や保護者の協力をえて『学習障害児  
教育検討会議』を設置（昨年八月）、五回にわたる検  
討結果の提言をうけて『学習障害児の理解と支援のた  
めに』というパンフレットを今年一月につくって県内  
の小中学校に配布してくださりました。今年は前記の  
研究事業が県で本格的にはじまります。検討会議や事  
例検討会に保護者が加わることは全国的にもあまりな  
いということを全国の親の会にいつて知りました。県  
教育委員会の取り組みの深さだと感謝しています。わ  
たしたちは親がわが子のことを良く知るといふ一点で  
勉強会をはじめました。その中でさまざまな人達の支  
援をえて、その勉強の中身が濃くなってゆくことを実  
感しました。支援の輪も広く深くなっていきます。  
この子たちをささえる理解者がふえること、そんな日  
本の社会が築かれて行くことがとても大切だとも思っ  
ています」

## いなほの会 講演会

### 「みんなで考えようLD児」シリーズ

平成 11 年 7 月、文部省(現、文部科学省)より「学習障害児に対する指導について」の報告がありました。その中で「学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は、推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害、などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない。」と、新しく定義をされました。

新潟県義務教育課からも、本年度、「学習障害(LD)児と支援のために」のパンフレットが県内各小中学校へ配布され、LD児への理解が深まりつつあります。

通常学級には、学習障害や学業不振、軽度の知的障害、軽度の自閉症、ADHD(注意欠陥多動性障害)などのこどもたちも在籍しています。そのようなこどもたちは特別な教育的配慮が必要です。しかし、このことが周囲に理解されず苦しんでいたり、自信を失っていたりする場合も多く見られます。

このように、LD児に対しては、親や教師がこどもたちの特性を理解し、一人一人の実態に合った具体的な取り組みを工夫することがとても大切と言えます。

いなほの会では、下記のごとく、3回のシリーズで講演会を企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

#### 記

月日	講師とテーマ	人数	会場	申込み開始
7月1日(日)	「LD児とADHD児について」 竹田契一先生 大阪教育大学教授 「通常学級での一指導例」 生田雅之先生 吉田北小学校教諭	200名	新潟 ユニソンプラザ	6月1日
9月2日(日)	「人と関わる力をのばす」 小賢悟先生 東京YMCA	100名	新潟市総合 福祉会館	8月1日
11月18日(日)	「中学校卒業後の進路について」 鬼頭美也子さん 前かたつむり代表	100名	新潟市総合 福祉会館	10月15日

日 程 : 10:00~16:00(予定)  
参加対象: 親、教師等こどもへの対応に関心を持っておられる方々  
参加費 : 会員 1,000円 会員外 1,500円 (当日徴収いたします)  
お申込み・お問合せ: 各講演会ごとに、ハガキかFAXにてお申し込み下さい  
整理券は発行いたしません

〒940-0051 長岡市西神田町2-2-8

新潟LD親の会代表 沼田夏子

TEL・FAX 0258-32-0037

主 催 : 新潟LD親の会「いなほの会」

# LD児支援の輪広がる



いなほの会の事例検討会。家庭や学校での子どもの様子を聞きながら、教師や専門家とともに指導計画を考える。

書く、読むなど特定の学習の習得などに著しい困難がある「学習障害（LD）児」の教育相談が年々増加、これに対応して教育支援の動きが、一、二年前、県内でも急速に進んでいる。県の会では学校や研究者などと協力して個別の指導計画を考える事例研究を一年前から開始。県教委も昨年度、専門家による検討会を開き、学習支援のあり方を検討してきた。本年度は、専門家チームの立ち上げなど具体的な事業もスタートさせる。

新潟LD児親の会（LD）の個別指導計画を立  
なほの会（沼田）で代わるといって、全国でも珍  
愛・会費約  
百人では、  
親と教師が  
協力してし

## 検討会開き学習指導

親と教師

や担任教師、大学助教、  
医師などが自立に向けた

組みでは、体操着をまくが深くない」「手順通り忘れていた児童が「張り紙や板の図かけなど視覚的なきり」などの問題を抱える高学年児童について、各自が教員に入れるようにする」という指導によって忘れなくなった。例えば「学校の机の下の整理箱とん」という短切りを縫って合せて「仕切りの字を毎日」という指導が「遅寝遅起」を繰り返して合せて「特別扱いと本人が感じないよう全校全体で整理箱とんに取り組んで、やりやすい方法を選択させては」などの指導方法が参加者から提案された。

今後、検討会で作成された指導計画を基に学校や家庭で実際に指導を行い、四カ月後に評価を行うこととしている。

同会では六年前の発足以来、会員同士の情報交換や交流のほか、講演会や学習会などLDへの理解を深める活動に力を入れてきたが、今回の取り組みは、より具体的な学習指導実践への第一歩。毎回一人のLD児について事例検討会を開き、親



## 自立へ長・短期目標

### 体操着も忘れず 読みやすい字に

## 客観的に見られる成果

長・短期の目標や、達成のための指導方法、家庭と学校の役割分担などを話し合っている。これまでの四回の取り

で読みやすい字を認めるようになったりと、効果も表れているという。一回に新潟市総合福祉会館で開催された検討会には約十人が参加。物

## 専門家チーム発足へ

### 県教委 パンフを学校に配布

学習障害児とは

県教委は、県としてのLDについて県教委は、LDについて討会議の報告の内容を煮詰めるほか、専門家チームを立ち上げ、研究協力校と連携を図りながら、指導法などをまとめたパンフレットを作成。LDの特徴や適切な指導法などをまとめたもので、学校現場での理解を深めようと、県内の小中学校などに配布した。ことにしている。

本年度は、文部科学省障害児教育係の青木仁指導主事は「LDが疑われる子どもの教育相談も年々増えている。今後の取り組みの中で適切な指導方法などを提供できたい」と意気込んでいる。

LDは全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するなど特定の能力の習得と使用に著しい困難を示す状態。児童生徒の2、3%程度がLDが疑われるといわれる。本人の努力不足と受け取られるなど理解されにくく、他人とのコミュニケーションがうまく取れない子もいて、いじめや不登校などにもつながりやすい。

LDに対する教育支援のあり方を探ろうと昨年八月、専門家や保護者からなる「学習障害児教育検討会議」を設置。今年一月まで五回にわたって検討が行われ、実態把握のための校内委員会やLDを判断する専門家チームの設置などを緊急課題とする提言をまとめた。提言を受けての具体的な取組みの第一弾として運営会議を設置して、検査